

再発見・牛久第九話

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

小川(芋銭)家系譜②

佐々木・木村・小川

源頼朝の木曾(源)家・平家

追討と佐々木家・木村家

源頼朝と挙兵の密議をこらした

佐々木五兄弟(頼朝と従兄弟)

平安時代(781年前後より

1181年前後)の最も末期、第77代

後白河天皇統治の下で、平(桓武平氏)

清盛は武士であるが、公卿に補任され

太政大臣に昇進して、政権を樹立した。

ところが、治承4年(1180年)8月、

源家(清和源氏)の棟梁頼朝が、後白

河天皇の第3皇子以仁王より発せられ

た『令旨(平家追討に参加せよ)』を受け

取って、配流地伊豆の蛭ヶ小島(現在は

静岡岡伊豆の国市)で挙兵、再び源

平合戦の火蓋が切られた。

宇多源氏佐々木経方の孫秀義は、

源為義(頼朝の祖父)の女婿で、子に定

綱、経高、盛綱、高綱、義清の五兄

弟がいた。頼朝と従兄弟にあたる五

兄弟は、頼朝と挙兵の密議をこらし、

五兄弟による挙兵第一戦で、伊豆目代

山木兼隆の館を襲撃してその首を討

ち取ることに成功した。以後五兄弟は各地の戦いで数多の殊勲を立てた。

ところが、その翌年の養和元年(1181年)に清盛が熱病によって没した。清盛は頼朝にとって父義朝の敵でもあった。

高綱と景季の宇治川先陣争い

頼朝は、寿永2年(1183年)12月、弟の範頼と義経を代官として大軍を授け、京都へ向けて出発させた。

範頼・義経兄弟軍は、翌年の1月に、宇治川(現京都府宇治市)で、木曾(源)軍を撃破して義仲を討ち取った。その宇治川の戦いで、佐々木家の四男高綱に逸話がある。

義経の軍勢が木曾(源)義仲を討つため宇治川に到達したとき、真っ先に駆け出した2騎がいる。前は梶原景季(桓武平家系鎌倉権五郎景正の玄孫。父景時は石橋山合戦のとき、味方の平家をおざむいて頼朝のいのちを助けた)、後は佐々木高綱。ともに頼朝から拝領した名馬、摺墨と生唆に乗っていた。はじめ景季が六間は高綱を引き離していたが、このとき歴戦の兵高綱は、二十三歳の若武者景季に向かって、『腹帯がのびているぞ、締め給え』と声をかけ、景季が手

綱を放して腹帯を締め直している間に、宇治急流に馬を乗り入れた。景季も謀られたかと後を追って馬を乗り入れたが、ついに追いつけず、佐々木高綱が宇治川先陣の名のりをあげたのである。

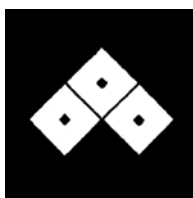
一の谷の戦いでは 木村俊綱が「平通盛」を討ち取る

義仲討死5日後の1月26日に後白河法皇より、範頼・義経に宛てて『平家追討』の院宣が発せられ、同兄弟は6万余の将兵を率い京都を出発して福原(現神戸市)に向かった。福原には、木曾義仲の軍勢によって「都落ち」して、清盛没後は一門の総帥の立場にある三男の宗盛が軍陣を構えていた。範頼・義経兄弟軍は途中、二手に分かれ、総大将の範頼は5万の兵とともに福原東の生田の森へ進軍、義経は1万の兵とともに、一の谷へ進軍。2月7日早朝から源平両軍の間で、激しい戦鬪が繰り広げられた。源氏は、白旗を押し立て、波状攻撃を展開し、赤旗を翻した一方の平家は、西の城戸口の防戦に努めた。両軍とも、見る見るうちに死傷者が増えたが、戦いの決着はなかなかつかなかった。ところが、義経が70騎を率いて背後の鴨越えからの逆落しの奇襲に出ると、平家の本営は、大混乱に陥った。折からの西風の中で、陣屋の一部に火が付けられると、平家の兵士たちは海岸の方に逃げだした。戦いは昼少し前に終わった。平

家方が受けた打撃は、通盛・忠度・経俊が範頼の配下に、経正・師盛・教経・敦盛・智章・業盛・盛俊が義経の配下に、相次いで討ち取られた。通盛は、清盛の弟敦盛の子で山ノ手口を守る大将であつたが、範頼の配下佐々木盛綱、同佐々木家の分家木村家の俊綱ら7騎の武士にかこまれ、ついに俊綱に討ち取られた。

佐々木五兄弟が17万国守護職に 源頼朝の鎌倉幕府創設の功で

源頼朝が征夷大将軍になって鎌倉に幕府が開かれると、佐々木五兄弟の定綱が近江・長門・石見、経高が淡路・阿波・土佐、盛綱が越後・伊予、高綱が備前・長門、義清が出雲・隠岐の総計17万国の守護職に補任され、それらの国々に子々孫々が繁栄して佐々木家は大族となった。



目結紋は宇多源氏の分家木村家、さらには木村家系の小川家の家紋である。木曾(源)義仲追討の際、宇治川の先陣争いで佐々木高綱の鎧直垂には「三つ目結紋」が見られる。目結いの「結い」は家と家、人と人を結びあうものとして、「目結紋」を用いる一門の結束を願ったものである。目結紋を用いている佐々木一族は今日では40万人以上ともいわれる。